

ロールシャッハ・テストプロトコルからみた 三島由紀夫の母子関係と同性愛

井原成男

はじめに：三島における初期の呪縛

ロールシャッハ・テストのプロトコルについて述べる前に、三島由紀夫の心性がいかにもその人生初期に規定されているか、言い換えると、彼自身がいかにも初期にこだわっていたかについて述べておかねばならない。

三島の出発点である、デビュー作『仮面の告白(1949)』(以下『仮面』と略記)は以下の書き出しから始まる。

「長い間私は生まれたときの光景を覚えていると言っては、周囲を驚かせた。」

三島の『仮面』については、創作という形をとりつつ、その大半は事実であるとされ、Yourcenar, M. (1980)を始めそれを事実と考える論者は多い(佐伯, 1988)。本論では一人の患者を診るように、『仮面』を患者自身の語り、そして『倅・三島由紀夫(1996)』(以下『倅』と略記)を父親や母そして家族の比較的客観的な語りとして用いる。『倅』において、父・倅は上述の記憶を、三島の空想であるとする。父の見方では、『仮面』にも、周囲に諷められたと記されているように、後から聞いた話をもとに、創作したものであらうとされ、これが常識的な見方であらう。

しかし筆者は現在、こうした現象を、感覚は倅として記憶され、後にその倅に情緒的な意味が与えられ、やがて言語化されるのではないかと考えている。山口(2011)も発達現象学の立場から、脳科学者 Libet, B. (2004)に始まり生理学者 Verla, F.J. (2001)にいたる論をもとに、感覚は記憶されるという意見を述べている。

筆者は、かつて日赤A病院におけるケース検討会で、中学生の登校拒否のクライアントが繰り返し見る、「街角に白い服を着た男がナイフを持って立っている」という夢に、何か心当たりはないかと母に問うたところ、母は涙を流し、「あの子には話していないが、生後3ヶ月のとき、兎口を麻酔無しで手術した」と答えたというケースを体験した。言うまでもなく、ナイフを持った白い服の男とは手術をした外科医である。

こうした報告は枚挙にいとまがない。例えば、Miller, A. (1985)の『禁じられた知』にはこうした夢と事実との一致が限りなく報告されている(一例を挙げると、成人してから見た、顔面が雪に覆われているという夢が、幼児期、親が窓を閉め忘れたために、雪で顔が覆われて半死の状態であったという事実と一致した例などである。この場合も夢を見た人に、その事実は知らされていなかった。事の真相をここで決定することはできないが、三島が、初期に限りなく規定され、それにこだわった作家であることは確か

である。それはまさに呪縛と言っていい。初期の記憶は枠として、あるいは夢の中に無意識として残存するのである。

三島の初期の母子関係は異様なものであった。多くの人がその異様さの一端として引用するが、『倅』によれば、三島の授乳は4時間おきで、祖母・夏子によって管理されており、授乳時間も10分か15分と決まっていたという(安藤, 1998)。また、早くから母親と引き離され、ヒステリー持ちの祖母のカビ臭い部屋に置かれ、祖母の世話役的な育てられ方をした。近所の男の子との遊びも悪戯を覚えてはいけないとの理由で禁止され、女の子として育てられた。祖母の名を差し置いて最初に母の名を呼ぶことが祖母のヒステリーを誘発することを恐れた幼い三島は、いつも祖母の名を先に呼ぶよう気を遣っていた(平岡, 1990)。こうした陰鬱な時間は、三島が16歳で書いた処女作『花盛りの森(1944)』の中に、「祖母は神経痛をやみ、痙攣を始終起こした。(中略)痙攣が、まる一日、ばあいによっては幾夜さもつづく、もっと顕著なきざしが表れてきた。それは『病氣』がわがものがおに家じゅうにはびこることである」と、幼い感受性でとらえた異常さと緊張が描写されている。ここには、①母性の早期の剥奪、②性の同一性の混乱、③依存を体験する前に大人に対する気遣いや世話を身につけてしまったことなど、世代の錯綜の問題などがすでに孕まれており、三島自身が初期に拘るようになるに十分な人生のスタートであった。

ところで、三島の祖母、永井夏子の実施した時間決めの授乳は当時アメリカで流行った授乳法であり、時間感覚の躰を目的とする。当時の日本の自然な授乳法である“オンデマンド”(山本, 1983)、つまり乳児が欲しがった時に授乳するという自然な方法とは正反対のものであった。三島が時間に律儀であったことはつとに知られている。三島は座談の名手であり、周囲を気遣い楽しませた。しかし、11時を過ぎると自宅に帰り、明け方まで執筆し、その後、昼過ぎまで就寝した(佐伯, 1988)。極めつけは、自決の前日に編集者小島千加子に翌日原稿を渡すことを約束し、入れ違うように死地に赴いたこと(小島, 1990)であろう。遺作『豊穰の海(1965~1970)』の最終稿の完成とともに、三島は割腹して果てたのであった(安藤, 1988)。この時間感覚はtime giverとして、初期の時間決め授乳によって形成されたものであると、筆者には感じられる。Time giverというのは、生後間もない乳児への授乳など養育者の行動リズムが、乳児のその後の時間感覚を決定するというものである(Klaus, et al., 1985)。三島の初期の授乳形式やその後、家に潜在した官僚的な形式主義が、長じて三島の時間感覚に大きな影響を与えている。これは感覚レベルにおいてさえ、三島が初期にいかほど大きく影響された作家であるかを物語る。それは影響という生易しいものではなく、まさに呪縛というにふさわしい。三島の遺作『豊穰の海』4部作は、輪廻転生の物語であるが、三島の最後の望みもまた輪廻転生という永遠の時間を主題にしていることは興味深い。

三島は周知のように、幼児期に女の子のように育てられた病弱な自分を否定するかのように、ボデービルやボクシング、果ては剣道にまで打ち込み、肉体の鍛錬による自己統制にこだわり続けたが、そうした感覚的なものを絶えず意識化し表現することを自らに課した。こうした鍛錬についての心理学的意味については後述する。

三島は、精神分析に関心をもっていたが、無意識という考えを嫌い(澁澤, 1988)、自分は無意識をすべて意識化できると豪語した(佐伯, 1988)。それは、彼が無意識たる肉体や生の感覚、はては記憶までも意識化しようという衝動であったと、筆者には思われる。

I. ロールシャッハ・テストCardXのプロトコルからみた母子関係

それではまず、ロールシャッハ・テストのプロトコルに表れた三島の幼児期あるいは幼児期的イメージ

の特徴を見ていきたい。以下（三島）とあるのは三島由紀夫の反応、（片口）は検査者片口安史の質疑ないしは反応である。Scoringはその反応ごとに示した片口法（片口、1987）によるもの、[]内は筆者の考えたExner, J. E. (2009)によるcodingである。Scoringおよびcodingというのは反応内容を要約する記号であるが、その意味についてはその都度、→以下において必要に応じて説明する。

Card Xは、背景にある三島の母子関係を考慮するなら、その特徴を最も端的に示すCardであると思える。プロトコルを以下にあげる。

「(三島) いま、まん中の青いのが女のブラジャーみたいにみえました。

D F± Obj, Sex [Do6 Fu Cg, Sx]

(→以下の斜体部分は、scoringおよびcodingの解説である。) →記号の±は片口のものであるが、標準的で妥当なもの見え方ということである。しかし、Exnerではuであり、見る人の少ない反応となっている(出現率2.5%以下)。ここでは、妥当ではあるが見る内容としては珍しいと考えておきたい。

「左右の赤いものは、そうですね、ブラジャーを両方から支えているのは胎児。

(片口) ずいぶんませた胎児。

(三島) ハッハッハ。

これが突然ブラジャーに見えだした。(略) そうするとこんどはブラジャーからくるいろんな性的な印象がはいってくる。この両側の赤いものはなんの印象もなかったのが、(略) だんだん胎児にみえてきた。(略) なんか2、3か月の胎児ですか、そんなものにみえてきた。」

D M± H [Do9 Mao (2) H, Cg 4.0 FAB GHR]

→FABとは作話的な反応であり三島の創作性であると思われるが、童話作家にはcodeされない。ここにも後に述べるような三島の空想的な性向が見て取れる。GHRはよい人間関係の表象であり、空想された初期の関係は理想化されている。

検査者の「ずいぶんませた胎児」という突っ込みに、三島は「ハッハッハ」とおそらくは高笑いで答えている。三島の高笑いはつとに有名であり(濫澤, 1986; 佐伯1988)、それは仮面を被った防衛的な笑いであったと思われる。

三島が受けた初期の養育は父方祖母・夏子による剥奪的な母子関係であった事は先に述べた。後に、三島が中学生になる頃、一家は祖母の家を出て親子3人で暮らすことになる。1週間に1度は祖母のもとを訪問するという条件の下であった。この3人の仲睦まじさは長じても続き、福島(1998)の三島との同性愛を告白する『三島由紀夫』の中にも、やっと親子水入らずで暮らすようになった父、母、三島の3人が、そろって散歩に出かける姿が目撃されており、仲睦まじい親子であったことが記されている。

三島は中学に入ったこの頃すでに創作に興味を見せるようになっていた。母・倭文重は父が開成中学の校長を務めた漢学者の娘であり、文学少女であった。三島は作品を書くとまず、母に見せ、この習慣は長じても続く。官吏になって自分の跡を継いでもらいたい父・梓が、原稿用紙を破り文学への道を邪魔しても、母は三島の才能を支えた。文学への道は、幼児期に分離を余儀なくされ、中学生になって再会を果たしたこの母子の、二人三脚の成果ともいえる濃厚な結びつきであった。自決の後、慶応大学で検死を終えた三島の遺体が南馬込の自宅に到着したとき、母は気丈に、「恋人がようやく私の手元に戻って参りました」と述べたという場面は、この母子の関係を語る有名なエピソードである(福島, 1998)。また三島自身も、「若い頃の母は大変な美人であった。母親は、私にとって、こっそり逢ひ引きする相手のようなもの、ひそかな、人知れぬ恋人のようなものであった」(三島, 1958)と述べ、ただならぬ結びつきを感じさせる。

こうした背景をもとに今一度、「ブラジャーを両側から支えている2、3ヶ月の胎児」という反応を見る

と、感慨深い。片口はそれを「ませた胎児」とコメントし、例のごとく三島は高笑いで応えているが、ここには2人のやり取りを超えた深い意味が隠されているように思われる。通常の知覚でこの部分を見ると、むしろ胎児が乳を吸っているという方がぴったりする。胎児の口にブラジャーが触れる部分は色が滲んでおり、吸った乳が滲んでいるように見える。三島の見た胎児は乳房を吸って甘えるのではなく、これを支えているのである。ここには父方祖母と母の関係を敏感に感じ取り、いつも母より祖母の名を先に言うように気を使った幼い三島の姿、長じて座を楽しませ、自身の創作になる劇を後部座席から、客の反応を気にしながら見ていた三島の感受性を彷彿とさせるものがある。おそらく片口は、臨床家としての直感から、「支える」に対して、胎児なのに、ずいぶん大人びていると感じたのである。それが「ずいぶん、ませた」という表現になって口をついて出たと思われる。

福島(1998)は、同性愛行為のために、ベッドに横たわり、「私がバスルームから出てきた時は、三島さんは、毛布もつけず、素裸のまま、目を閉じて仰向けにねていたが、その恰好は、子犬が人の愛撫をうけるとき、腹を上にし、四肢を可愛く曲げる、あの姿態を連想させた」と描写し、それを「自分の身を任せるべき母性の掌を求めていたのではないか(略)。わがままな祖母の専制的支配下で、幼児期から、ご機嫌とり役をさせられていた三島さんは、母親の腕の中で、慈しみ深くその目で眺められ、その掌で抱かれたという幼い記憶にかけているのでは」ないかと書いているが、愛人としての感覚で事の真相を見抜いているように思われる。

胎児という反応は、よき人間関係(GHR: Good Human Relation)に判定されるものであり、三島の中にある理想の愛の姿を彷彿とさせる。三島の母が後に友人の演出家・長岡輝子に語ったところによると(高橋, 2010)、三島が望んで果たせなかったものは、①ノーベル賞を取れなかったこと、②美智子妃(正田美智子)と結婚できなかったことであるという。三島は皇室に入る直前の美智子妃と聖心女子大の同窓会を通じた推薦によるお見合いしており、その美しさと立ち居振る舞いに魅了され、その後、理想の女性になった(高橋, 2010)。『豊穡の海』4部作の第1巻『春の雪(1965)』に登場する理想の女性、綾倉聡子のモデルは美智子妃であるとされており(高橋, 2010)、美智子妃は三島の中にある純愛と理想の女性の系譜に連なる。

Card Xのもう一つの反応は「孢子」であるが、空井(1974)は、三島は最初この部分を精子と見たのではないか、その方が自然であるという。「孢子」という名前を思い出せない三島は、百科事典を調べに立ち上がり、この反応を正確に表現した。ここに、理想の男女関係(その出発は母親の理想化であるが)それを性的なものとして表現できず、精一杯、百科事典を調べてまで、植物という比較的無性のものに意識的に表現し直そうとしている三島の姿を見ることができる。

母子密着と母親の理想化の性向は長じて美智子妃に投影され、実らぬ恋として理想化されたと思われる。三島は、人生の指針とした『葉隠れ』に憧れ(三島, 1967)、「忍ぶ恋こそが最高の恋である」という境地に達しているが、ここにも男女関係の美化・理想化がある。三島の男女の関係の理想化・純愛化の系譜として、『岬にての物語(1945)』→『潮騒(1954)』→『春の雪(1968)』という流れがある。後の政治的な行動や、デカダンな太宰を毛嫌いしたその行動性と平行して、三島には純愛や男女関係のロマンチックな理想化が根強く存在しているのである。

II. ロールシャッハ・テストIVカードのプロトコルからみた家族関係

Card IVのプロトコルは次のような印象的な反応から始まる。

「性器が花になった怪物が、ワニのような怪物の上にまたがっている。それがこちらに向かって突進してくる（三島は初め性器の部分で「花」と見ていたが、質疑段階で、「性器が花になった」と告白している）。

W M+, FM, Fc (H), (A), Sex [W+1 M.FMo (H), A, Sx, Bt P 4.0 FAB PHR] →片口法では副反応（重み付けが半分になる）としてFcがスコアされているが^{注1)}、それは性器の部分であり、Exnerでは濃淡はcodeされない微妙な反応である。しかしExnerでもこの反応はPHR（悪性の人間関係）示す指標がcodeされている。」

Card IVは父親Cardと呼ばれることもあり、権威や抑圧するものに対するイメージが喚起されやすいとされているが、三島はこのCardに、いかにも彼の女性恐怖を顕著に示すような、「性器が花になった怪物」という反応をしている。しかもその怪物は「こちらに向かってくる」恐ろしいものなのである。

筆者は、母親のイメージを持つCard、父のイメージを持つCard、家族メンバーに対するイメージなどを尋ねることがあるが（井原、1981、1986）、祖母は果たしてどのCardか聞いてみたいところである。空井（1974）は、この反応に三島は祖母・夏子のイメージを見たのではないかとしている。三島は、母親を理想化し、理想の女性については延々と語り、また女形・中村歌右衛門の鼻唄であり、歌舞伎によく通っていたが（中村・三島、2012）、嫌悪する女性については語らない。作品には両者の女性が描かれている事実は松本（2005）が詳細に考察している。『仮面』の中で三島は、幼少時、祖母のカビ臭い部屋で、ジャンヌ・ダルクの描かれた絵本を見て、性的な興奮を覚えたものの、それが男装した女性であることを知り、その絵を見るのをきっぱりと止めたというエピソードが語られている。恐怖し嫌悪する強い女性像は抑圧され、後にこれが女性像の分裂を招くのである。

筆者には、この感覚は祖母・夏子への抑圧された恐怖であり、女性嫌悪であると思われる。そして以下に語られているように、「女性性器が花になった」という反応に自分自身でも異様なものを感じたのか、術学的で知的な言い訳をしている。

「（三島）いかにもシュールレアリズムの絵の感じがあったんですがね。よくマッセルニストやダリの絵にありますね。人間の顔が花に、女性生殖器みたいな花ですね、蘭みたいな。そういうものが顔になってまして、（略）下にはワニみたいなのがいて、その上にまたがっているような感じがする。この両側のバツバツというのは、こっちを向いて突進してくる。こういうのを見るといけないのは、つまりシュールレアリズムの絵にすぐみえてしまうことですね。つまり全然自分の直観であるのか、どこかでみたああいうものか。教養体験というのかな、そういうものがどこかではいつてきてしまって、それがどのへんに、自分のどのへんにそれが位置しているかというところが、僕は普段、シュールリアリズムは好きじゃないですからね。ただこういうもの見たときに連想として出てくるだけであって……。」

先に、このCardは父親に対するイメージが投影されやすいと述べたが、三島は父のことを祖母と同じタイプの人間、しかも祖母を小さくしたような人間であると述べている（猪瀬、1995）。父・梓はいかにも官吏といった強い強迫的で、細かい性格の持ち主であった（猪瀬、1995）。いかにも気が弱く固い官吏タイプの人間を連想させるが、それ以上に特筆すべきは、その鈍感さである。現在であれば理詰めのアスペルガー型の人格であると考えられる可能性が高い。その鈍感さは、父・梓自身にとっては「勇気」という形で間違えて観念されていた可能性が高い。筆者が心理臨床家として、この父親に最も違和感を感じたのは、父・梓が『倅』の中で、自ら幼い2、3ヶ月の三島を強い子にしようとして行った「脅しの教育」を誇らしげに語っている次のエピソードである。

「僕は倅が（略）女の子のように育っていくのがとてもたえられず（略）ある日、新宿に連れて行きましたとき、ちょうど蒸気機関車が通るのを見て、さっそくそばに行きました。（略）『こわいか、大丈夫だよ、

泣いたら弱虫でどぶに捨ててしまうよ』といいながら、伴の顔をうかがいました。ところが案に相違して、全然反応がない。(略)やはりだめでした。キャツキャツよろこぶようになるかというと依然能面で、すっかり諦めました。全くその謎は解明できませんでした。』

これは乳児三島と父・梓との感覚のずれ、それも微妙なずれなどではなく、常識的に誰もがおかしいと思う情景である。

こうした事実を後日、三島の表情が時として能面のようにであったという事実と関連させて、一種の自閉状態を三島に引き起こしたのではないかと猪瀬(1995)は語る。また、彼は三島の作品の中にもその例証を見つける。処女作『花盛りの森』の中にある駐車場の描写が、この時のことが三島に記憶されているのだというのである。引用しよう。「線路の一部がうす白く光っている上を、大きな機関車が何度も喘息の発作をつづけながら発車するところが見えるのであった。(略)父はいつも連れて行ってくれるごとに、子どものぞみどおりにしばらく線路のそばの柵に立ってくれた。線路のむこうでは赤い夕日の残りのようなあまたのネオンが、黒い背景の中で、わがままな星のようにまわっていた。」これは幼い三島の中に記憶された父による虐待の記憶ではないのか。ここでもまた、先に述べた、感覚は梓として記憶され、後にその情緒的な意味が与えられ、やがて言語化されるのではないか、という筆者の仮説との一致を見ることができる。幼い三島は強くなったのではなく、あまりの驚愕と恐怖ゆえに、心を凍らせたという方が適切であると、筆者もまた感じる。

ここには、三島の深く抑圧された母性幻想と心的に幼い三島を理解することができず、自決後も妻・倭重枝から、「あなたは公さん(三島)のこと、まるっきりわかってらっしゃらないわ」(福島、1998)となじられ続ける父親不在の姿がある。母性剥奪と、父の虐待と無理解という慈父的なものの不在こそが、三島の同性愛の家族因であると思われる。

三島の防衛としての自閉状態は、Reich, W. (1964)の「性格の鎧」を連想させる。性格の鎧とは、防衛しなければならぬ、あまりにも過酷な状況に対して使う防衛がやがて、その人の性格の中核をなすようになるという考え方である。先に、三島は、30歳頃からポデービルに熱中するようになり、それは死の時まで続いたという事実を述べた。ソフトな女性らしさと、ポデービルで鍛えた筋骨隆々たる肉体は対照的である。三島は、そうした反動形成を使って、かつて自分に強制された運命のような女性的で、ひ弱な我が身を鍛え直したのである。

しかし、これは反動形成という生なかななものではなくBick, E. (1968)のいうsecond skinの概念に近いのではないか、その方が三島の幼児期の母性剥奪と込みにして、その病的防衛の姿をより理解しやすくすると筆者には思われる。Second skinとは、本来母親の暖かな皮膚にくるまれて過ごされるべき乳児期が剥奪されると、それに代わって、乳児は第2の皮膚ともいうべき防衛を発達させるというものである(Bick, E. 1968; Anzie, D., 1993; Ulnik, J., 2008)。第2の皮膚は、筋肉やスポーツ、衣服など様々な形をとって表れる(三島が市ヶ谷の自衛隊で最後の演説をしたとき、身に付けていた「楯の会」の制服もそれにあたるかもしれない)。三島のポデービル熱はそのようなものである。

また、事はそれにとどまらない、自閉の心性を早くから身につけた三島は、とても繊細であり、現実から隔離されながら、それを知性で補うというまさに刻苦勉励の人生(武田、1990)を送った。ポデービル、ボクシング、剣道もそれであり、本業の大量の執筆に加えて、対談、果ては俳優としての出演作品、『からっ風野郎』や映画『憂国』では主演を見事に演じきっている。春の雪などの肉筆原稿を見ると(秋山、1990)、その字の綺麗さには驚かされるが、これにしても刻苦勉励のなせるわざであり、悪筆を克服するために、ペン習字まで習った^{注2)}。それは多彩な才能であると同時に、彼の自己防衛としての刻苦勉励の

姿なのである。彼の日常はまさに一分の隙もないほど、ぎっしりと埋め尽くされていた。

ところで、自閉症の微に入り細を穿った、寸分の互いもない記憶力には特筆すべきものがある。たとえば杉山（2000）の自閉症児の報告によると、ある小学2年の自閉症児、てる君が描く映画フィルムのような経時的な絵は、たまたまこの子の日常生活を克明に記述していた母親の日記と寸分の互いもなく一致していた。これもまた、さきに筆者の述べた感覚の記憶、つまり『仮面』の冒頭にある、「私は生まれたときのことを克明に覚えている」という書き出しの例証と言える。三島の父・梓の及ぼした無自覚の鈍感さはいかほどの運命を、息子三島由紀夫に課した過酷なものであった。

Ⅲ. ロールシャッハプロトコルからみた同性愛

同性愛の定義であるが、筆者は大原（1987）と猪瀬（1995）に従って、体質遺伝的な真性のものと環境によって形成された心因性のものがあると考えている。性格にも真性の部分と環境による部分があるように、同性愛にも環境的に形成された部分があると考えており、三島についていうと、環境因によるものが多いと考える。Kinsey（1941）の基準で考えるなら、三島は結婚して2人の子をもなしているのに、Kinseyのいう5級、つまり主として同性愛であるが、異性愛的でもあると、ここでは暫定的に考える。筆者は同性愛を必ずしも異常なものとは考えていない。異性愛にも異常なものがあるように、同性愛にも正常なものと異常なものがあると結論している。

筆者は三島のいわゆる自決は、実は同性愛者の心中事件ではないかと考える。剖検された三島の体内には他人（森田）の精液があったとされる（高橋，2010）。いわゆる男女間の交合後の心中のように、三島は、楯の会同志森田必勝との心中を果たしたというのが筆者の意見である。楯の会には薩摩の郷中教育（安藤，2013）にも似た、同性の絆の強さがある。佐藤（2001）によれば日本中を驚かせた心中事件は、必ずその直前に、情交を果たしている。村松（1990）をはじめ、三島の同性愛は彼一流の演技であり、実際に同性愛はなかったとする意見も多い。しかし福島（1998）の告白的著作には、福島が20代後半から三島の同性愛の相手であったことが述べられている。この告白はその具体性から判断して事実であろう。Nathan, J. (2000)の著作も、三島自身が認めた同性愛の事実を裏付けている。

こうした前提をおいた上で、ロールシャッハ・テストから三島の同性愛はどのように判断されるのか、順次見ていきたい。

1. ロールシャッハ同性愛指標RHIの特徴

片口（1978）が従来の諸家の同性愛研究を総合し、自身の臨床的体験も加味して作り上げた男性におけるロールシャッハ同性愛指標RHIには18の特徴が示されているが、ここでは比較的ウエイトの大きいものを中心に、三島のロールシャッハ・テストプロトコルに反映されている指標を取り上げ、そのプロトコルの特徴と組み合わせて考察する。最後に、①彼の女性像の未統合と分裂、②自己評価の低さゆえの刻苦勉勵的な努力について、ロールシャッハ・テストの語り（プロトコル）に表れた特徴から述べる。

片口のRHIによれば、反応中に、①女性性器（膣、子宮、陰毛、乳房など：IV）、②男根象徴（棒、魚雷、蛇、ナメクジ、その他：X）、③性別の認知における混乱（Ⅲ、Ⅵ）、④女性の服装、あるいはアクセサリ（X）、⑤異常でグロテスクな人間あるいは動物（IV）、⑥神秘的、芸術的、宗教的な表現（Ⅱ）のあることが、その基準になる（括弧内にあげてあるローマ数字はロールシャッハCardの三島における該当Card番号）。その他に、⑦女性に対する嫌悪、軽蔑の表現があげられている。三島の反応（IV）は女性に

対する恐怖の反応であるので、これには該当しないが、嫌悪や軽蔑よりも恐怖は、十分に同性愛の原因になりえると筆者には感じられる。ちなみに、三島のRHI得点は10であり、同性愛グループの平均得点18.0 (SD,6.10) の範囲11.9より少ないが、統合失調症群 (平均3.9) や神経症群 (平均5.9) ももちろん正常群 (平均2.3) よりは遥かに上回っている。先ほどのKinseyの基準で考えると5級であり、同性が主であるが、異性とも交渉できる形の同性愛であると思われる。

2. 三島における人生初期のイメージと性の抑圧

(1) 「まん中の青いのが女のブラジャー。」「左右の赤いものはブラジャーを両方から支えている胎児。」

(2) 「小さいモミジの種子みたいなものがありますね。モミジのあれ、なんていったかな、胚子、あれみたいな。字引をひいてみましょう。(ここで辞書をとりに行く) 芽でもない。そのものはおわかりでしょう。ブラジャーから性的ないろんな連想に変わっちゃって、モミジの芽なんて言っちゃったのかもしれない。

D F ± Pl [Do3 Fu Bt] →片口法では、合理的な形態である±に評定されているが、Exnerの基準ではu、つまり、まれな反応に判定される。また、語りを聞くと、この反応には性的な連想が含まれている。

空井 (1974) は、三島が字引を引いてまで正確に表現しようとした行動には性的なものを抑えようとする防衛が働いているという。片口のRHIでは13つまり「男根象徴=胞子」と判断されている。

(3) 「性器が花になった怪物が、ワニのような怪物の上にもたがっている。それがこちらに向かって突進してくる。」

(1) から (3) について、三島の初期体験から考察する。

(1) の「ブラジャーを支える胎児」という反応は、その人生初期において幼い三島が、いかに周囲に、特に母と姑の仲に気を遣ったかを考えると、筆者には涙ぐましい反応に感じられる。こうした気遣いについては、母の当時の日記を始め様々なところに記述されている (平岡, 1990; 佐伯, 1987; 福島, 1998)。幼い三島が「お婆あさまより先にお母様」と言おうものなら、祖母・夏子のヒステリー発作を誘発し、「そんなにお母様がいいのなら、もうあちらへお行き、二度と私の方にくるな」と手のつけられない状態になるのであった (平岡, 1990)。こうした精神的な幽閉状態が家に漲っていたことは、先に引用した三島16歳時の処女作『花盛りの森』にリアルな感覚で描写されている。再三引用してきたCard IVへの反応が「花になった性器を持った恐ろしい怪物」であることを考えあわせると、この作品の表題が「花盛り」とはなんと皮肉なタイトルであろうか。三島の処女作は、この陰鬱さから理想化されたロマンチックな世界への逃避であった。

続く (2) で三島は、「ブラジャーから性的な連想をした」と答えており、明らかに精子を見たのだと思えるが、それでは女性 (母) との近親姦的な連想を賦活しすぎると思ったのか、慎重に、辞書まで調べて、それを植物の性である胞子にかえている。①ブラジャー②それを支える胎児③胞子は、同じCardの中での連想であり、三島の異常な幼児期にあった母性剥奪と、三島自身 (1958) がそのように語っている母との恋人のような関係を考え合わせるとこの反応に、三島の母性の理想化とその禁止、女性に対する理想化 (後にそれは美智子妃に対する理想化へと結実するが) という連想が湧くのは自然である。

さらに (3) では、女性性器が花に変形され、それが「怪物となってこちらに向かってくる」とされるが、こうした一連の連想は、このCardが内的な権威像を表現することの多いCardであることを

考え合わせると、三島の中にある無意識の女性恐怖と女性への嫌悪の抑圧を感じさせる。こうした3つの反応から、三島の中には女性イメージの分裂と、無意識的な女性嫌悪への抑圧が存在していると考えられる。

3. 三島における女性イメージ

これまで三島の性に対するイメージは、ブラジャーで乳房を覆う女性像（これはその背景から考えて原初的な母親像であろう）を必死で支える、まだ生まれて間もない胎児であり、理想化される女性像であると同時に、その女性性器が花にカムフラージュされ、こちらへ向かってくる怪物という否定的な女性でもあるという、同時に2つのものが混在していることについて触れてきた。それではもう少し意識化された層に見られる女性像はどのようなものであろうか。

Card VIIは母親Cardと呼ばれることもあり、女性に対するイメージが喚起されやすい柔らかな印象を持つCardであり、女性の像が見られることが多いCardである。

〔三島〕これは両側から向かいあっている女の顔にみえます。頭の髪の毛が（略）踊っているようにもみえるし、あるいは顔を向かい合わせながら、両方へ向かって、反対の方向に逃げようとしているようにもみえる。首だけねじ曲げている。（略）こうなって、こうなって顔が後方を向いて、手がこっちを向いている。首をねじ曲げている女の感じ。ティーン・エージャーの女の子だな、たぶん。ポニー・テールがシューッと風で飛びはねている。『イーッ』って言っているような、ね、しかしそれは首だけですから、からだは両方離れようとして（略）いるわけです。

W M+, m H P [W+1 Ma. mo (2) H P 3.0 GHR] →片口はこれをかなり形態の説明のよい反応として扱っているが、Exnerではよくある反応であると判断される。両方法ともに葛藤の指標であるmを含んでいる。」

この反応は良好な二人の人間の関係を示しているが、内容は、「首をねじ曲げて、反対の方向に逃げ出そうとしている女の子」であり、女の子という反応に託されて表れた、三島の女性への葛藤を示していると考えられる。この後Card IXで、童話的な反応を出した三島は、自分には「幼児退行的な部分がある」と自己分析してみせている。幼児退行的な方法でのみ、刻苦勉励型の三島は緊張を解き、本音を見せることができるのかもしれない。

4. 三島のプロトコルに見る自己評価の低さ

いま、退行的に緊張を解くと述べたが、次に上げるカードVは、一休みCardとも呼ばれ、この不思議なテストに緊張しつつ反応を構成してきた被検査者が、その形の単純さゆえに一息つくCardである。

「ガみたいなものですね。これが何か死にかけている。すっかりその、ハネや何かがしおたれて死にかけたガでしょうか。（略）ガというものは、羽がプワプワになっちゃって、ガボガボになっている。雨かなんか打たれて（いる）。

W F± A (P) [Wo1 Fo A 1.0 MOR] →片口では平凡反応であるが、Exnerでは死んだとか、割れた、ぐちゃぐちゃになったといった否定的でグロテスクな反応に対するMorbidがcodeされる。この死にかけた蛾が、鎧を脱いだ三島の仮面の下の自己評価であるとするなら、この反応は捨てがたい重みを持ってくる。」

Card Vに三島は、「蛾」と応えているが、このCardに蝶と反応する人と、蛾と反応する人では、その自己評価に差があるということが再三述べられてきた（空井、1974、1994）。蛾と答える人の方が自己評

価は低い。三島は、ほっと一息つくこのCard Vで、「死にかけた蛾」という反応をしている。こうした否定的な自己像は、次のCard VIの反応にも見られる。この反応は主要な反応をした後に、ふっと漏れた反応である。

「(三島) よくみていたらこっちを向いている顔のような、目は笑っているような、半ば悲しそうな顔がこちらを向いている。この上の部分ですね。ちょっと、男の顔か女の顔かよくわかりません。(略) 生えた毛がよくこういうふうになっておりましょ？そのうち顔にみえたのは、これが目で、このへんが口で、これが鼻で、これがマユ毛でしょうかね。こういうような顔がみえてきた。(略) なんの顔かわからないんですが、半ば笑っているような半ば悲しそうな、(略) かなり年をとっていますね。大学教授みたいかな、目尻がさがっているから。半分笑っているような感じですけども、口をすぼめた感じがちょっとsadな感じがする。

dr F+, M Hd [Do6 Mau Hd, Hx GHR] →この領域はめずらしい領域の区切り方であるということがわかるが、領域図が公表されていないため、どの領域かは推定するしかないが、このCard VIIは、ふさふさした毛皮などの濃淡反応(陰影反応)が見られることの多いCardであり、そうした濃淡で区切られる領域が使われた可能性が高い。それは片口が、濃淡ではなく単なる形態反応とscoreしていることから推測される。Exner (2009) でもこの領域は珍しいものに分類される。」

この悲しげな大学教授はかなり珍しく、おそらく濃淡を境界とする領域を使った、三島の内的にふと表れた反応であると思われる。三島の遺作『豊穡の海』には、その4部作を通じて一貫して表れる、世界を俯瞰する存在である本多繁邦という大学教授が登場する。本多はしばしばこの世界の諦念を語る老いたる人であり、大学時代の三島と同じく法律を専攻している。その意味で、三島の生きられなかった部分を表す影(Storr, A., 1983)の部分であると考えられる。

三島の自己評価はその表面の華やかさや強さとは裏腹に、とても低い。また、まるでエディプス・コンプレクスを作品化したような『午後の曳航』には、母親と憧れの船員・竜二との情交を隣の部屋の節穴から覗き見する14歳の主人公・登が登場する。覗きとは何であろうか。それは仮面や鎧の中からじっと世界を見ている、傷つきやすい三島の心の本質ではなかろうか。三島は、多くの人が語るように(濫澤1986; 佐伯, 1988)、蟹が嫌いであったという。それはまた否定的な鎧であり、去勢する大きな剣を持った、あのCard IVに見たような「性器が花になった怪物」、祖母・夏子のイメージなのではなかろうか。三島はこうした恐怖症を生涯、本質的には乗り越えられなかったのではないか。安藤(1987)には、下田の東急ホテルで、海が怖く(三島は泳げなかった)三島の子どもがどう勸めても海に入らない筋骨隆々たる三島の無惨な姿が描かれている。

ところで、三島はこのテストで初めて目にするCard Iの中央部分に、「スカラベ」と答えている。スカラベとはカブトムシのことであり、文字通り鎧で身を固めているのである。McCully, R. S.(1971)はCard Iのこの領域には、自己イメージが表れることが多いとしているが、この固い兜を持つスカラベが三島の自己像だとすると、まさに彼のデビュー作が『仮面の告白』であるという事実と符牒が一致する。

こうした三島の心性をsecond skinというKlein派の分析家Bickの概念によって解説する。Second skinとは、乳児期に本来、自己を包み、守ってくれる母性的な保護が剥奪されると、乳児はその事態への防衛として、自分自身を包み込む、不自然に完璧な第二の皮膚を作り上げてしまうというものである。それは初期の対人関係に不全感を持つ人に表れる病的形態の一つであるが、三島のポデービル、ボクシング、剣道への熱中はこうしたsecond skinの例証であると考えたと納得がいく。三島はこうした歪んだ自己としてのsecond skin、防衛の皮膚や鎧の中から世界や現実を見ていたのではないか。三島ほど自己

にこだわり、自己を知性的に分析した作家はいない。覗き見とは、sadな大学教授のように、どうしても否定しきれぬ「本当の自己true self (Winnicott, D.W., 1971)」が、真にリアルな世界を覗いている姿に思える。

おわりに：三島における創作の意味

Card IXは、最も回答の難しい、形態の曖昧なCardであり、それだけに被検査者の内面が如実に表出されるCardである。このCardは彩色Cardであり、上・中・下と3つの領域に分かれている。このCardを含むCardⅦからXの彩色Cardに対する三島の反応は増えている(Ⅶ+Ⅸ+Ⅹ% = 42.9%, 平均34.6%)。しかし意識的には三島は以下に述べるように答えにくいと述べており、二つの事実には矛盾がある。その理由は、三島は外界の色彩に感情的に反応しているながら、意識的にはその感情を否定しているということである^{注3)}。

「どうもあれですね、色があるとイメージーションが限定されますね。黒白の方がいろんなものにみえやすいんだけど、色があるととっても限定されちゃって、浮かんでこないな、なんにも。①上の方は、おとぎ話の魔法使いが長い爪で戦ってて、②それをのせているのは緑色の大きな2羽のトリで、③その下の方に火が燃えていて、そして遠くの方にぼんやりと、この、青い炎のローソクがまん中に立っているというような感じがする。①長い爪を伸ばしているやつがいるでしょう。これは色からくる感じがあると思います。非常に児童画やなんかの色と似ていましょう？(略)そういう昔みたおとぎ話の絵本みたいな色をしているという感じがして、それからこれが魔法使いにみえてきて、②その下に大きなワシみたいなトリがそれを支えている(略)③下は炎であっても雲であってもいい。(丸印の番号は引用者)

W M+, FC, CF, FK, KF, m (H), (A), Fir[W+1 Ma. CF. FV. YF. mao (H), (A), Fi 5.5 AG FAB PHR]→この反応は決定因のデパートのように様々な知覚形態を示しており、三島の感受性の豊かさを知覚面で検証しているような反応である。片口法では形態の豊かな+形態であるが、Exnerの統計では、通常の0反応である。また、非現実的な反応として、FABになる。三島自身の語る幼児退行的な反応は、異常な反応としてcodeされるのである

反応の中に①から③の番号をつけたが、三島の反応は上から順に、①戦っている爪のある魔法使い、②下から支えているワシのような大きな鳥、③火や雲などのもやもやしたものに分かれている。言い換えるなら、①は、知性を使い刻苦勉勵的に戦っている現実(爪のある魔法使い)、②は、その下の層にある大きく支えてくれるもの(大きな羽のワシ)、③は一番深い層で蠢いている得体の知れぬ恐怖(雲)や怒り(火)という形で三島の内面が三層に投影されたと考えられる。

①はロールシャッハ全体にちりばめられた学術的な反応であり、これこそが三島の創作の意味であると思われる。②は抑圧された母性への希求と女性の理想化であり、これが三島の同性愛の環境因の一つであると思われる。また③は、祖母・夏子によって生じ、最も深く抑圧された権威としての女性像への恐怖、自己分析の大家、三島によってさえ、生涯自覚されることになかった恐怖の実態であり、愛する母と恐れる祖母との間で幼い三島に気を使わせ、その敏感さを強め、気を使う自分を疲弊させた深き環境因なのではなかろうか。そうした気遣いは、また裏腹に、「本当の自己true self(Winnicott, 1971)」を表出できぬゆえの自己嫌悪と自己評価の低さとして結実する。正直な自己を表現できない不全感こそが、それを修復reparation (Lopez-Corvo, 2003)しようとする刻苦勉勵の強迫的な人生を生んでしまった。三島の作品は、こうした不全感の、きらびやかな修復の作業でもあった

三島の必死の修復が、ここに述べた抑圧の構造に無自覚であったために破綻したことは、すでに周知の事実である。

注

(注1) $F_c = 1$ は少なく (平均, 0 ~ 4), 三島は愛情希求を抑圧している可能性が高い。

(注2) <http://hello.2ch.net/te>

(注3) $FK + F + F_c \% = 35.7\%$ (平均, 53.5%) は低く, 三島における感情の統制の困難さと行動化しやすさを示している。

引用文献

- 秋山駿編 (1990). 三島由紀夫 群像 日本の作家18. 小学館.
- 安藤武 (1987). 三島由紀夫・研究年表. 西田書店.
- 安藤武 (1998). 三島由紀夫の生涯. 夏目書房.
- 安藤保 (2013). 郷中教育と薩摩士風の研究. 南方新社.
- Anzie, D. (福田素子訳) (1993). 皮膚-自我. 言叢社.
- Bick, E. (1968). The experience of the skin in early object relations. *International Journal of Psychoanalysis*, 49:558-566.
- Exner, J. E. (中村紀子他監訳) (2009). ロールシャッハ・テスト. 金剛出版.
- 福島次郎 (1998). 三島由紀夫-剣と寒紅. 文芸春秋社.
- 平岡梓 (1996). 倅・三島由紀夫. 文芸春秋社.
- 平岡倭文重 (1973). 暴流のごとく. 小学館. (秋山, 1990に収録)
- 井原成男 (1981). ロールシャッハ・テストの母子差と治療への適用. *ロールシャッハ研究*, 23:145-158.
- 井原成男 (1986). 交換ロールシャッハ法-ロールシャッハ・テストによる母子関係分析の試み-. *ロールシャッハ研究*, 28:1-13.
- 猪瀬直樹 (1995). ベルソナ・三島由紀夫伝. 文芸春秋社.
- 片口安史 (1978). 改訂 新・心理診断法. 金子書房.
- Klaus, M. H. et al. (竹内徹他訳) (1985). 親と子のきずな. 医学書院.
- 小島千加子 (1973). 最後の電話. 小学館. (秋山, 1990に収録)
- Lebit, B. (下条信輔訳) (2005). マインド タイム. 岩波書店.
- Lopez-Corvo (2003). The Work of W.R. Bion. Karnac, London.
- 松本徹 (2005). 三島由紀夫 エロスの劇. 作品社.
- McCully, R. S. (片口安史他訳) (1977). ロールシャッハ象徴学. 新曜社.
- Miller, A. (山下公子訳) (1985). 禁じられた知. 新曜社.
- 三島由紀夫 (1944). 花盛りの森. (花盛りの森・愛国. 新潮社, 1968.)
- 三島由紀夫 (1947). 岬にての物語. 新潮社.
- 三島由紀夫 (1949). 仮面の告白. 新潮社.
- 三島由紀夫 (1954). 潮騒. 新潮社.
- 三島由紀夫 (1958). 母を語る. 婦人生活社.
- 三島由紀夫 (1963). 午後の曳航. 新潮社.
- 三島由紀夫 (1965). 春の雪. 新潮社.
- 三島由紀夫 (1967). 葉隠れ入門. 新潮社.

- 村上宣寛他 (1991). ロールシャッハ・テスト. 日本文化科学社.
- 村松剛 (1990). 三島由紀夫の世界. 新潮社.
- 中村歌右衛門・三島由紀夫 (2012). 歌舞伎の伝統美を語る. 文芸別冊 三島由紀夫, 184-195. 河出書房新社.
- Nathan, J. (野口武彦訳) (2000). 三島由紀夫-ある評伝. 新潮社.
- 大原健士郎 (1987). 心中考. 太陽出版.
- Reich, W. (小此木啓吾訳) (1964). 精神分析技法論. 岩崎書店.
- 佐伯彰一 (1988). 評伝・三島由紀夫. 中央公論社.
- 佐藤清彦 (2001). につぼん心中考. 文藝春秋社.
- 澁澤龍彦 (1986). 三島由紀夫おぼえがき. 新潮社.
- 空井健三 (1974). 三島由紀夫のロールシャッハ反応の再吟味. ロールシャッハ研究XV・XVI, 137-147.
- 空井健三 (1994). ロールシャッハ・テストによる三島由紀夫の精神病理. 別冊・現代のエスプリ 精神病理の探求, 14-22.
- Storr, A. (山中康裕訳) (1997). エセンシャル・ユング. 創元社.
- 杉山登志郎 (2000). 発達障害の豊かな世界. 日本評論社.
- 高橋英郎 (2010). 三島あるいは華麗なる復讐. 飛鳥新社.
- 武田泰淳 (1971). 三島由紀夫氏の死の後に. (秋山, 1990, 新潮社に収録).
- Ulnik, J. (2008). Skin in Psychoanalysis. Karnac, London.
- Yourcenar, M. (澁澤龍彦訳) (1995). 三島あるいは空虚のヴィジョン. 河出書房新社.
- Varela, F. J. et al (田中靖夫訳) (2001). 身体化された心. 工作舎.
- Winnicott, D. W. (1965). Playing and Reality. Karnac, London.
- 山口二郎 (2011). 感覚の記憶. 知泉書房.
- 山本高治郎 (1983). 母乳. 岩波書店.